

第33回院内学術研究発表会

令和3年2月4・5日

1. 当院における言語聴覚療法の現状と課題

リハビリテーション科

○沼田 梨奈 中野 朋子
藤本 智久 岡田 祥弥
行山 頌人 井上 貴博
六山 梓 川合 寛
山上 遼 大道 克己
堀川 晃義 大島 良太
井上 紗希 土屋 栞
中島 正博 森本 洋史
西村 暁子 岡 智子
西野 陽子 皮居 達彦
田中 正道

高度急性期病院での言語聴覚療法のニーズは年々増加し、対象となる患者は全診療科に渡り、業務の細分化も進んでいる。そのような状況において、私たち言語聴覚士は、限られたマンパワーの中で優先順位をつけて、言語聴覚療法が必要な患者に対して早期からもれなく介入することを心がけている。

今回、今後の課題を明確にする目的で、当院における言語聴覚療法の過去5年間の現状調査を行ったので若干の考察を加え報告する。

2. 当院におけるがんゲノムプロファイリング検査の現状と課題

ゲノムカウンセリング室

○谷口 真紀 中川 卓
和仁 洋治 田村 和朗
山本 繁秀 春名 勝也
永谷 たみ 島田 健
村上 陽子 井上 豊子

福井由紀子 伊藤 絢子
藤田 裕子 安東 正子
安井 典子 甲斐 恭平

2019年6月に2種類のがんゲノムプロファイリング検査（以下、がんゲノム検査）が保険承認された。がんゲノム検査の対象は、標準治療がないまたは終了、終了見込みとなった固形がん患者で、かつ検査結果説明後に薬物療法が実施可能であることが予測される患者である。がんゲノム検査の目的は、遺伝子解析結果に基づき効果が期待される治療法を探すことである。そのためがんゲノム検査を受検する患者・家族は、治療候補薬剤が見つかることに期待を抱いていることが多い。しかし実際に治療に結び付く可能性は1～2割程度と言われている。さらにはがんゲノム検査では二次的所見を認める場合もあり、患者だけではなく家族への対応が必要となることもある。

当院では2019年9月から2020年10月までに46人が検査を受検しており、治療に結び付いた人は4人（8.6%）であった。また二次的所見を認めたのは4人（8.6%）であり、そのうち遺伝外来受診者は2人であった。

がんゲノム医療が進歩する中で、地域がん診療拠点病院である当院でのがんゲノム検査の現状を検討したので報告する。

3. 小児科で今年度行った運動負荷心電図検査の検討

小児科

○阪田 美穂 上杉 裕紀
岡田 怜 岡田里枝子